

験的に検討したところ、指示を与えた場合には、自我の弱い者は、自我の強い者より早い step で反応し、また、自我の強い者は Interval が長い場合に、自我の弱い者は逆に Interval が短い場合に、早い step で反応することが示された。

309 人格特性評価における社会的一致性の研究

岡村 浩志(日本大学)

パーソナリティテストの項目を社会的な望ましさ(SD)の観点からみれば、SD に一致する集団と一致しない集団がある。そこで、両者の間に質的な差があるかどうかを検討する。結果として、SD に一致する集団からステレオタイプな評定傾向がみられた。また、SD に一致しない集団を不適応とするのは、問題を残す。

310 CAT による幼児の依存性と攻撃性に関する研究 (2)

○丸井 澄子(岐阜大学)

大山 雍子(仙台市精神衛生相談所)

幼児の対人関係における攻撃的傾向をしらべるために、男女児 30 人づつを被験者として CAT を施行し、反応を Stone, H. の方法によつて整理してみた。カード別では 7 と 3 とに男女児の比較では男児に攻撃的反応が多く、カテゴリー別では、表面的行動による表現が多い。また男女児ともに母との情緒的結合が強い。

311 Q-technique による Self-concept の研究 (第 3 報告)

藤原 喜悦(東京学芸大学)

学業不振の中学 2 年生 13 名(男女 4 名、女子 9 名。教室における一斉授業についていけないもの。ただし、精薄を除く。)に、現実自我および理想自我について 2-sorting (forced distribution による。)を行なわせ、その相関係数を偏差積法により求めたところ、その大部分のものが、ほとんど相関を示さないことが明らかにされた。

討 論 の 概 要

部会の特徴

この部会では 5 つの研究発表が行なわれた。これらの研究は共通して Projective test とか Inventory を使用しているが、それぞれ異なったねらいがあつたので討議は 4 つの群にわけて行なわれた。先ず、小川(307)と吉田(308)は自我の強弱と認知機能の関連についての研究であつた。前者は TAT と Inventory との関係に

ついてであり、後者は Intolerance of Ambiguity との関係についてである。岡村(309)は広く行なわれているパーソナリティ・テストを「社会的に望ましい」という観点からみなおそうとした。丸井ら(310)は CAT による幼児の攻撃性の測定についての研究であつた。最後に、藤原(311)は Q-technique による Self-Concept の研究であつた。この中で、部会での討議がもつとも活潑であつたのは、第 1 群の小川、吉田らの研究であり、この種の問題の不明確さを示したものと云えよう。この部会での大よその流れとして 2 つのものがあつたように思われる。1 つは自我の強弱とパーソナリティの関連、あるいは自我とプロジェクト・テストにあらわれるものの関連であり、2 番目は質問紙の結果にあらわれたものをいかに処理するかという問題であつたが、いずれも問題を数多く含んでいることの表れと思える。

自我の強さと認知機能

小川は TAT とインベントリーとの間に反応の差があり、欲求特性によつてその表れ方が異なることをのべたが、藤丸(金沢大)はプロジェクト・テストとインベントリーとの間に相関があるのかないのかと質問したのに対して、どちらともいえないと説明した。小川が求護欲求は社会的依存であり、社会に容認されない欲求であるとのべたことについて、星野(国際キリスト教大)は求護欲求を社会的依存と考えてよいが、社会的に容認されない欲求というのはおかしいと反論した。また、星野は自我に脅威をあたえることがプロジェクト・テストに出るというが、そうすれば自我の弱いものは出ないのかと質問したのについて、小川は自我が強くなければ投影にでないものであり、いわば投影法は自我機能の強さを測るものと考えてよいとのべた。これについては数多くの意見が集中した。吉田は自我の強弱と曖昧な図形の認知との間に関連があるとのべたが、これについてはいくつかの意見が出たので吉田は更に、曖昧なものを正確に認識できるのは自我の強さの 1 つの指標であり、これは小川の研究と同様に曖昧な刺激も自我の強いものがはつきりと判定できるのでであると付け加えた。藤原は自我の強さ、弱さはパーソナリティの中核と関連しているため Self-concept と Ego-function の関係をよく検討しなければならぬのではないかと提案した。このように自我の強弱と投影法の表現度合の関連について討議が進んでいった。

人格特性評価における社会的一致性

岡村は人格特性評価において望ましいパーソナリティが操作的に作り出され得ることをのべたが、この結論を

導くまでの研究過程について多くの質問が出た。山根(埼玉大)からは YG スケール項目の客観的な評定の過程で、被験者数を 80 名から 50 名にしたり、7 点尺度から 5 点尺度にした理由が質問された。更に、山根は評定点の高低がそのまますぐに社会的に望ましい項目とか社会的に望ましくないと言えるかどうか疑問だと評したのに対して、岡村はこの場面でのパーソナリティは社会的な適応の問題であり、なにが望ましいかといってくる非常に複雑なことになってくるので此处ではふれていないとのべた。岡村は社会的な一致度をみる場合に、尺度の切れをよくするために中立的な項目を省いていたが、藤原はここでの研究目的が異なっているため態度尺度と同じように“中立的な項目”を省くのはよくないと主張した。

CAT による幼児の攻撃性

丸井は幼児の攻撃性を CAT によつてみようとしたのであるが、プロジェクト・テストにおける攻撃性の捉え方についていくつかの意見が出された。藤原は攻撃性をどのようなとらえ方をするのか、また、Stone の方法と比較したのかと尋ねたのに対して、丸井は普通には 1 図版からいくつかの攻撃性が出てきても 1 番高いものだけをとっているが、この研究ではそのすべての頻数を加算していつたと答え、Stone とは比較していないこ

とを明言した。星野は一般に攻撃性の測定でいつも問題になるのは測定の結果でできた攻撃性と実際にもついている攻撃性が一致するものか、一致しないものであるかであるがと疑問を投げたのに対して、丸井はその実験場面の構造と被験者の質によつてオーバートな行動とファンタジーな行動のちがいが出てくるのであり、プロジェクト・テストの場面では非常に重要な問題であると答えた。更に、オーバートな行動とファンタジーな行動のちがいは男性の実験者と女性のそれとでもちがつてくると、アメリカの Sears, R のやつたドール・プレイの結果を紹介した。人物のちがいによつて攻撃性の表現が異なってくるのを星野が紹介した。すなわち、イリノイ大学で P-F を利用して、そのままの図版で攻撃性を取り、それと教師と警官への攻撃性の資料をあつめて比較しようとしていると。このようにプロジェクト・テストによる攻撃性の測定には解決しなければならぬ問題が多く横たわっていることが示唆される。

Q-technique による Self-concept

藤原は Q テクニックによつて学業不振の中学生がいかなる自己概念をもっているのかをつかもうとしたが、岡村は適応点として 99 パーセンタイルがでてくるのは紋切り型の態度ではないかと批判した。

(野村勝彦)

13. 人

格 (3)

312 達成動機の研究 (VIII)

一達成動機と risk-taking—

○山内 郁・林 保(京都学芸大学)

Atkinson 等の研究によると、達成動機が成功や成就に向かう動機の強さを示すに対し、Mandler と Sarason の Test Anxiety (TAQ) 得点は、失敗をさけようとする動機の強さを示すものと考えられた。我々は、この両動機を関連づけて輪投げの如く risk-taking 事態でいかなる行動をとるか検討した。

313 連想の経過にあらわれる自我関与の実験的研究 (3)

○早川三野雄・丸井 澄子(岐阜大学)

自我関与の問題が、現実接触的な機能をもつ自我と継続的自由連想の内容に現われる自己像という、自我の体験的側面と連想の経過的内容の側面から検討された。実験群、統制群各 4 名の分裂病者に 2 系列の刺激語群を与え、4 実験場面を設定した。その結果、健全な自我は現

実と接触し、現象的な自己像を再体制化すると推定された。

討 論 の 概 要

部会の特徴

本部会は、6 つの報告が予定されていたが、発表取消しが 4 つあり、山内ら (312) の研究と早川ら (313) の研究の 2 つのみが報告された。

討議の内容

発表数が少なく、従つて研究報告が予定時間より早く終了したので、座長の提案により、発表者 2 名に、報告補足の時間が与えられた。発表者 2 人はそれぞれ、約 5 分間発言を行い、その後、質疑応答が行われた。

まず、山内の「達成動機の研究 VIII」に対して、この研究で、2 つの要因、すなわち、test-Anxiety と n-achievement を組合わした理由についての質問(氏名不詳)があり、それに対し山内は、risk-taking の問題は、達成動機のみでは解決することができない。事